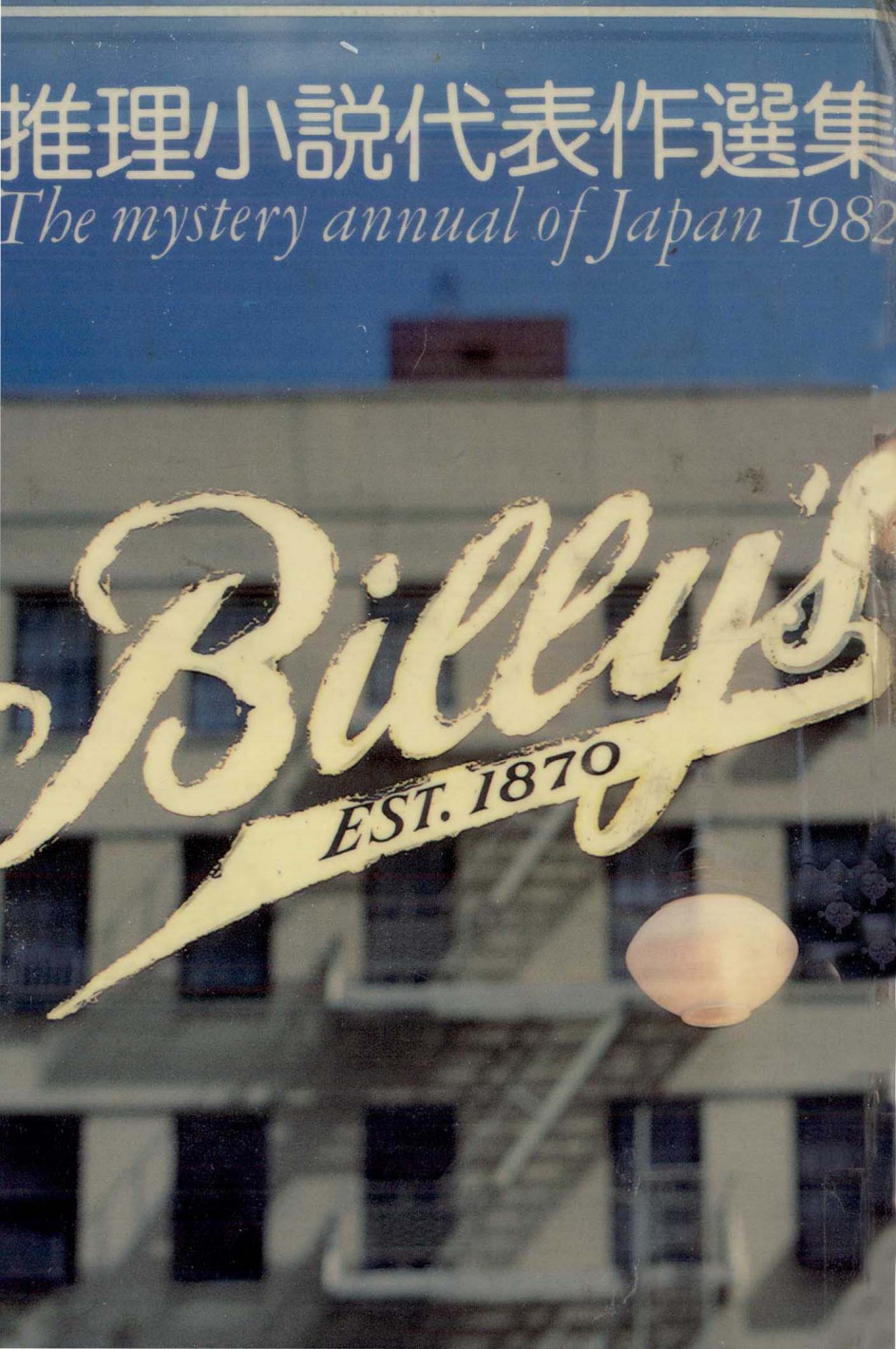


推理小説代表作選集

The mystery annual of Japan 1982

Billy's
EST. 1870





The mystery annual of Japan 1982

1982＝推理小説年鑑 推理小説代表作選集





1982年版 推理小説年鑑
推理小説代表作選集 定価 1600円

昭和57年 6月30日 第1刷発行
昭和58年 3月23日 第2刷発行

編 者 日本推理作家協会
発行者 三 木 章
発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽 2-12-21

郵便番号 112

電話東京(945)1111 振替東京 8-3930

印刷所 豊国印刷株式会社
製本所 株式会社黒岩大光堂

© 日本推理作家協会 1982 Printed in Japan
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にておとりかえいたします。

ISBN 4-06-114524-X (0) (文 2)

1982年版 推理小説年鑑

推理小説代表作選集〈目次〉

序・	山村正夫	
色慾の迷彩・	梶 龍雄	9
青ひげ荘の殺人・	栗本 薫	29
夜の印画・	三好 徹	45
明智光秀の密書・	井沢元彦	59
死者の電話・	佐野 洋	83
マッチ箱の人生・	阿刀田高	99
純情な蠍・	天藤 真	115

死者の嘘・	夏樹静子	137
屎尿カー・ブルース・	胡桃沢耕史	157
シェイクスピアの誘拐・	笹沢左保	177
甘い脅迫状・	伴野 朗	201
ゆうづる5号殺人事件・	西村京太郎	231
偽りの構図・	結城昌治	263
誰かが裁く・	西村 望	283
帰り花・	長井 彬	311

木に登る犬・・・・・・・・・・日下圭介
341

一匹や二匹・・・・・・・・・・仁木悦子
363

昭和56年度ミステリー回顧・・・・・・・・二上洋一
394

SF界1981・・・・・・・・・・風見潤
398

海外ミステリー1981年・・・・・・・・戸川安宣
402

受賞リスト・・・・・・・・・・
405

デザイン・写真(カバー) 細谷 巖

写真(本表紙・扉) 目羅 勝

序

日本推理作家協会理事長

山村正夫

推理小説はこれまで、プームの定着とともに、エンターテインメントの主流としての安定期が長く続いていた。その安定は、昭和三十年代から四十年代にかけて登場した、中堅作家の業績に負うところが大きかった。それはそれで喜ぶべき現象には違いなかったが、一方ではいささか新陳代謝に欠ける憾みもなかった。

推理小説が未来への発展を為し遂げていくためには、常に新風をもたらす作家の出現を待たなければならない。むろん江戸川乱歩賞を始め各社の新人賞が人材発掘に寄与してはきたものの、かつてのジंकスであった、十年周期説を裏付けるような華々しい現象は、しばらく見られなかった。

だが、昨今の有力な新鋭作家の輩出と活躍は目覚ましいものがある。まさに目白押しの感が強く、長編はもちろん、短編においても優れた作品が、毎月各誌の誌面を賑わせている。推理小説界は愈々新時代の到来を迎えたのである。

協会編の「代表作選集」(年鑑)は、前年度に発表されたおびただしい短編群の中から、既成作家と新人作家の作品を同列の基準で討議し、十数編を選ぶという厳選主義を取っている。それだけに最も權威のあるアンソロジーとして定評があるが、ここ数年來の収録作家の顔触れを眺めると、新たな作家の進出が著しく、明らかな選手交替の兆しが見られるのだ。それは各巻の目次を見て下されば、読者にも自ずとわかつて頂けることと思う。

一九八二年版の本書は、六百八十七編の短編を対象にして、協会より委嘱した郷原宏、権田萬治、中島河太郎、中村利夫、武蔵野次郎の五氏に選考の勞を煩わせた。日下圭介氏の「木に登る犬」は、第35回日本推理作家協会賞短編部門の授賞作の一編である。本書を通読して下されば、最近の多様化した推理小説の傾向が鳥瞰できると同時に、新時代の活気に富んだ息吹きをも、併せて感じ取って頂けるものと信じている。

一九八二年三月

1982年版 推理小說年鑑

推理小說代表作選集

色慾の迷彩梶龍雄

船木敏明の堀川警部への告白

「わかりました。私をおぼえているという、そんな証人がいるなら、すべてを告白するほかはないと思います……」

船木敏明は告白を始めた。

九月四日午後一時少し過ぎのことだった。

堀川警部は立ち上がって、西向きの窓を閉めた。

今日の夜にでも、台風は中部地方に上陸するかも知れないと予告されていた。

そのために、警察署のあるこの高原地帯も、きょうはさすがに陰鬱に蒸し暑かった。

警部は吹き込む風に飛び散りそうになる書類や、写真やらを、さつきから茶碗や時刻表の本でおさえて文鎮代りにしていた。だがとうとうたまりかねて、窓に立ったのだ。

これで部屋にすっかり閉じ籠められたことになる。すぐに蒸し暑くなった。

だが警部は、すぐにその暑さを忘れていた。

船木の語り出した、問題の殺人事件の告白は、筋道立った中に、異常で妖しい人間心理の業のようなものを、はげ

しく立ち昇らせていたからだ。

「……順を追って、話したいと思います。あの日、私が水戸の出張から、常磐線の急行、ときわ8号で帰って来たのだとしたら、あるいは上野駅あたりで逆に列車に乗る妻の利恵を見たのではないかという、あなたの想定はおそろいでした。さつきも申しあげたように、確かにそのとおりです。」

私の列車の到着は十六時四十分、そして妻の飛び乗った急行、信州5号は十六時五十三分発でした。

私はかなり遅れて列車からおり、おまけに売店で買いのなどをしていたのです。そして妻の方はこれまたひどく遅れて、発車時刻ぎりぎりに駅に駆け込んで来たらしいのですから、運というものはほんとうにわかりません。

私はホームからのりかえ通路にむかって、階段をおり始めました。その時、よく見知っている柄と色の、妻の服らしいものが、目の下を横切った……ええ、何度も申しあげたように、ただそれだけだったのです。

私は階段を駆けおりました。

通路にはもう妻の服はありませんでした。

しかし……ええ、警部さんのお調べになったとおり、白樺苑の管理人のおかみさんやそのほかの数人から、妻の浮気のことば聞かされていました。だから、彼女が行くとしたら、当然軽井沢あたり……そういう連想は浮かびました。階段下の列車発車表示を見ると、すぐ隣のホームから、

十六時五十三分発急行、信州5号、長野行の案内が出ていました。

もし妻が来るのなら、この列車に違いない！

頭の上ですでに鳴り立てるブザーにむかって、私は階段を駆け上がりました。

ホームに上る寸前にブザーは鳴りやみました。

妻の服の色は、もうどこにもありませんでした。おそろく手近の入口から列車の中に飛び込んだのでしよう。

しかし私は飛び乗りませんでした。

なぜだとききつめて問われると、それは返答にちよつと困ります。

警部さんの御指摘のとおり、妻のあの男との情事を知つてからは、確かに私は嫉妬に狂つておりました。同時に、寝取られた男としてのみじめな傷の痛みに、うめいてもいました。それを隠そうとは思いません。

だが、それだけに、ここここにいたつても、まだ信じたくない気持ちがあつたのです。

いや、あるいは避けがたい真実に直面することを、恐れていたのかも知れません。

私はためらいました。そしてその間に、列車のドアは閉まつてしまつたのです。

初め警部さんは、私も妻といつしよの、信州5号、に乗つて後を追ひ、妻が別荘についた直後に現われて、殺害をしたのではないかと、ずいぶん問い詰められました。

あの列車の軽井沢到着は十九時十七分、そこから別荘までは車で十分、歩いても二十五、六分ですから、確かに犯行推定時間の二十時前後……つまり午後八時に間に合います。

でも、それは警部さんの単なる仮定だったことは、私が午後五時半に上野駅前のお茶店で部下と会つたというウラがとれたことで、はつきりしました。

しかし警部さんはその直後に、また私が上野駅に引き返して、急いで妻の後を追つたのではないかと、いろいろと時刻表をひっくりかえされました。

喫茶店で話を終つて、私がひとりになつて外に出たのは、六時二十分であることは、警部さんもごぞんじのとおりです。上野駅のホームまでは走れば五分くらいですから、私は六時二十五分……つまり十八時二十五分には列車に乗れます。

だが、軽井沢方面に行く信越本線の列車間隔は、通勤列車を通すためでしょうか、あの時間帯はバカにあいていて、二時間近くも一つも発車列車がないのです。

妻の乗つた、信州5号、が出たあとは、何と一時間五十三分も間があつて、十八時四十六分にやつと、あさま17号、が出て、そのあとはまたちやうど一時間おいて十九時四十六分に、あさま19号、が出るということでした。

確かに私は、あさま17号、にも、もちろん19号にも乗ることはできました。

しかし17号の軽井沢着は二十時五十四分で……別荘につくのは二十一時過ぎになってしまおうで……。死亡推定時間は死体硬直の状態や、毒物の吸収状態、また男のほうの傷や血痕の死後変化から、二十時を中心に……ええと、前後三十分の幅でしたか……すると十九時半から二十時半ということになりますから……とてもその列車では間に合わないことになるというのでしたね。

もちろん17号のあとの19号ともなると、軽井沢着は二十一時五十四分ですから、これは論外でした。

警部さんは、推理小説の列車時刻トリックにあるような、何か巧みな工作がおこなわれたのではないか……例えば特急に乗って、前の急行を追い越すというようなことも、お考えになったようですね。

しかし妻の乗った急行以後は、二時間近くも間があつて、やっと特急のあさま17号が出るのでは、これは問題になりませんでした。

警部さんはそのうち、上野からは信越本線と上越線が、高崎まではいっしょに走っていることに目をつけられました。

信越本線のみ時刻表を見る限り、確かに、信州5号、以後は、あさま17号、まで発車列車はありません。

しかし上越線にはその間も、かなりたくさんさんの発車列車がありました。ええと……えつ、九列車？……そうでした、そんなにたくさん出ているのでした。

警部さんはその列車で、私が高崎まで行き、そこから高崎発あたりの列車で軽井沢に行ったのではないかと、お考えのようでした。

だが十八時二十五分以降では、そんなうまい乗りつぎなどできないこともわかりました。

最後に警部さんは、上野の喫茶店を出ると、すぐ、私は車をぶつ飛ばして軽井沢まで行ったのではないかと考えられました。

確かに私は車を運転しますし、車を持っていきます。

今年の七月に関越の高速道路の東松山から前橋までが延長されてから、軽井沢に行くのもおそろしく早くなりました。

警部さんは、実際に誰かに車を走らせてみて、所要時間をお試しにもなってみたとか……。

すると上野の喫茶店を出た私が、すぐ車に乗って出発したとしても、都心を抜けて練馬の入口に行くまでは……えつ、最低十分？……それからあととうんと速度をあげて高崎か前橋まで行くのに一時間から一時間十分、そこから軽井沢の別荘まではまた一時間で、どうしても二時間半以上はかかる……そうでしたね。すると私の別荘到着は二十時五十五分以降となり、やはり犯行推定時間の枠からはみ出てしまうということでした。

どうもいろいろよいなことを考えさせたり、手間をかけさせたりして申し訳ありません。

だが、何度も申しあげたとおり、私は上野の喫茶店で六時二十分に部下と別れてから、まっすぐ家に帰ったのです。はあ、しかし……そうですか、私のそのへんの心理と行動はどうも納得できないと、なおも調べられて、とうとう証人を見つけたと……。

すみません。正直に……私の気持も行動も、赤裸々に申しあげます。

そのためには……少し話が横道にそれますが、どうか聞いてください。

警部さんがお調べになったとおり、私が妻の浮気のことを初めて聞かされたのは、白樺苑の管理人のおかみさんからです。

『……その人、船木さんの別荘を建てた宮村工務店の息子ですよ。建築中によく手伝いにも来て……旦那様も何度かごらんになっていらつしやる人じゃありませんか？』
おかみさんは忠義面ちゅうぎめんのうしろに、悪魔的にたり顔を隠してはいませんでした。

その息子を思い出すも、思い出さなくてもありませんでした。

その男は初めから、私の印象に強く残った青年だったのです。

彼は工務店社長の父の代理をしていたようで、現場に来ると、図面を開いて職人に指示を与えたり、トラックで運び込まれる建築材料をチェックしたりして、きまりよい身

のこなして動いていました。

いつも鍔つば広の麦藁帽をかぶり、仕事にかかると、すぐにシャツをとり、上半身を裸にしました。

話さなければならぬことがあって、彼のそばに近寄ると、カラマツのしげりのフィルター越しに降り注ぐ陽の光が、麦藁帽を焦がす匂いが微かにしました。

同時に明るい小麦色に陽焼けした肌から、ほのかな汗の匂いも漂ってきます。

『そうか！』とか『そういうわけか！』というのが口癖で、その時の彼の顔は、ひどく人なつこく、子供っぽい表情になりました。

宮村工務店は雲場池の方に少し入ったカラマツ林の中にある、ヒュッテ風のしゃれた建物でした。

三度ばかり、私はこの工務店を訪れて、建築を請負った社長のおやじさんと、打ち合わせをしたこともあります。

そんな時、彼はたいいてい隣の部屋で図面台の前に坐っていました。

深い林の中にあるそのあたりの建物は、どこも薄暗いので、部屋にはいつも照明がついていました。その中で彼は眼鏡をかけて仕事をしていました。

ええ、彼は少し近眼だったようですね。しかしそれがまた、彼を外にいる時とは違った、好ましいインテリ青年に見せていました。

別荘が建つまでに、私は妻の利恵をつれて、三度ばかり

進行の状態を見に行きました。そのたびに、その息子……宮村隆は現場にいました。

別荘ができあがったあとも、彼は改修部分の手入れなどで、何度か別荘に現われました。

ですから妻と彼とが親しくなっていく経過は、この目で見ていくわけなのですが……。

ええ、その時、私が何も感じなかったといったら、確かに嘘になります。

ともかく私と妻は十五歳も違うのです。私はもう四十半ば近く、しかも結婚したのもまだ六年前なのです。

というのも、それまではひたすら自分の研究にむちゅうになっていた学者バカで、はっと気づいた時は、もう三十も終りに近づいていたというところなのです。

だがそのおかげで研究もかなりの成果が上がり、そのために今は七宝製薬会社という大製薬会社の研究開発所長という、社会的地位や経済的余裕も得たのですから、その点は悔いていません。

利恵のような若く、美しい妻を得たのも、やはりそういう背景があったればこそ思っております。

『その歳になって、あんな若くてきれいな奥さんをもらったんじゃ、浮気しないか心配で、気の休まる暇がないだらう』

と、よく友人にからかわれました。だが、彼等の宮仕えに疲れた顔や、彼等の糠味噌臭くなってきたびれた奥さん

などを見ると、『ざま、みやがれ！ 嫉妬してやがる』と、内心、快哉を叫んでいたものです。

そりゃあ、気の休まる暇がない。などと、大袈裟な感じではありませんが、あるそこはかとい不安はいつもありました。

しかしその不安感は、裏返せば、若く美しい妻を持つているためのものであるという、得意感やスリル感でもあったわけです。

ですから宮村隆と妻とが話し合っているのを、他から見る形になる時にも、私は内心どこかでその光景を楽しんでいるところもあったのです。

宮村隆は好もしい青年だ。そんな男と私の若く美しい妻……うむ、似合いのカップルといえないこともないぞ。

だが、隆君、お気の毒だが、彼女は私の妻なのだ。しかも私を熱烈に愛している妻なのだ。

警部さん、バカげたことだと思わないでください。ひそかに私はそんなことを考えて、ますます満足感をふくらませていたのです。

だが、白樺苑の管理人のおかみから、妻と彼とのことを聞かされた時、私は逆上しました。

二人の仲は、私の満足感を刺激する空想であって、現実であってはならないのです！

それはおかみの見まちがいであると、信じようとしませんでした。